

(鹿屋市郷之原町榎崎)

位置と環境

遺跡は鹿屋市の西北部に位置し、北側にそびえる1,000m級の高隈連山の裾野にあたる。標高は約106mで南側に舌状に延びる丘陵の端部に立地している。丘陵下には高須川の支流が流れており、小谷を挟んで西側には榎崎B遺跡、東側対岸には飯盛ヶ岡遺跡が所在する。

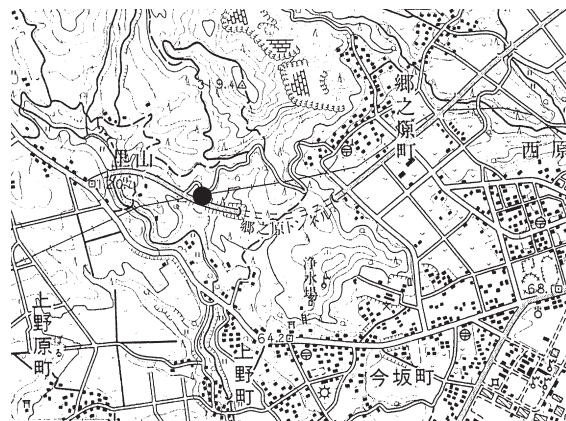
調査の経緯

鹿屋市街地を北に迂回する国道220号鹿屋バイパス建設に伴い、県教育委員会では国土交通省大隅河川国道事務所（当時、建設省大隅工事事務所）から委託を受け、ルート上に所在する遺跡の調査を昭和54年度（1979）から計画的に実施した。榎崎A遺跡はその一環として、昭和63年（1988）から平成元年（1989）にかけて発掘調査が行われた。

遺構と遺物

調査の結果、旧石器時代細石刃文化期、縄文時代早期から前期、弥生時代、古墳時代、平安時代の各時代にわたる遺構・遺物が発見された。

旧石器時代は、薩摩火山灰層の下から小規模な礫群が1基と細石刃を出土するブロック（遺物集中地点）が3か所検出された。遺物は細石核、細石刃、石核、剥片、削器、搔器、楔形石器、打製石斧、礫器、ハンマーストーンなどが出土している。細石核などの石材は、黒曜石を主体としているが、近くの高隈山系で産出する水晶や石英を素材としたものも出土している。ブロックごとに使用された石材などに若干の違いが見られる。特に、Cブロックでは水晶製の野岳型細石核（第2図1）と砂岩製の畦原型細石核（第2図2・3）が共伴して出土している。

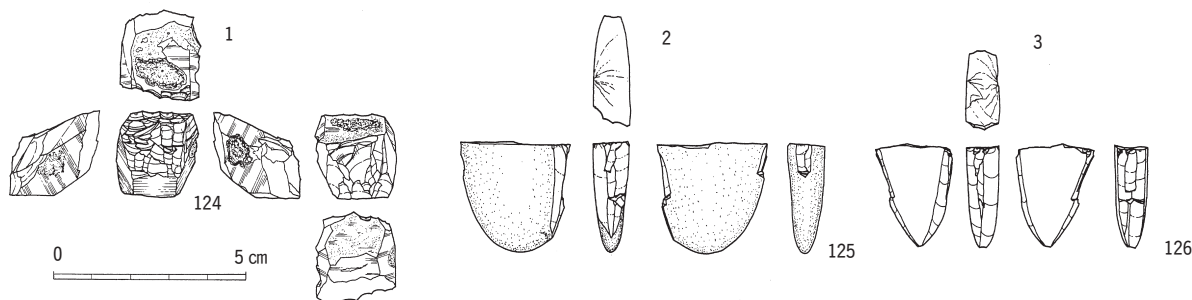


第1図 榎崎A遺跡の位置

縄文時代は、調査区のほぼ全域にわたってV層（アカホヤ火山灰層下）の早期に該当する時期とIII b層の前期から晩期に該当する包含層から遺物が出土している。

早期では、集石遺構が21基検出されている。その形態は、平面的に散在するものや、地面を30cm程掘りくぼめてその中に200個あまりの礫が入っているものなどが検出されている。また、石皿や磨石と石坂式土器1個体分が集中して出土した場所もあり、当時の生活の跡ではないかと考えられる。

早期の土器としては、前平式土器、石坂式土器、押型文土器、塞ノ神式土器等が出土しているが、主体は石坂式土器（第3図）である。これらの石坂式土器は、口縁部が大きく外反する典型的なタイプはほとんど見られず、口縁部がまっすぐ立ち上がり、文様も簡素化する新段階のものであると考えられる。石器は打製石鏃、スクレイパー、石斧、礫器、磨石類、石皿、台石などが出土している。石鏃等の剥片石器の石材には、県内各地の黒曜石やチャート、頁岩が利用されている。礫器は、扁平な円礫を片側から打ち欠いて刃をつけた片刃のものである。磨石類



第2図 Cブロック出土の細石核

(磨石・敲石・凹石)は52点出土しており、ひとつの円礫の中に磨った痕跡や敲いた痕跡などが複合して観察されるものがほとんどである。磨石の重さと長さの相関を見ると、小型・中型・大型の3つのグループに分けられるようである。磨石類は、木の実の殻を割って粉にする用途などが想定されているが、作業の種類によって適当な重さと大きさの石を選別して使用していたことが考えられる。また、使用により石鹼のような形状に成形されたものもあり、使用状況を考える上で興味深いものである。

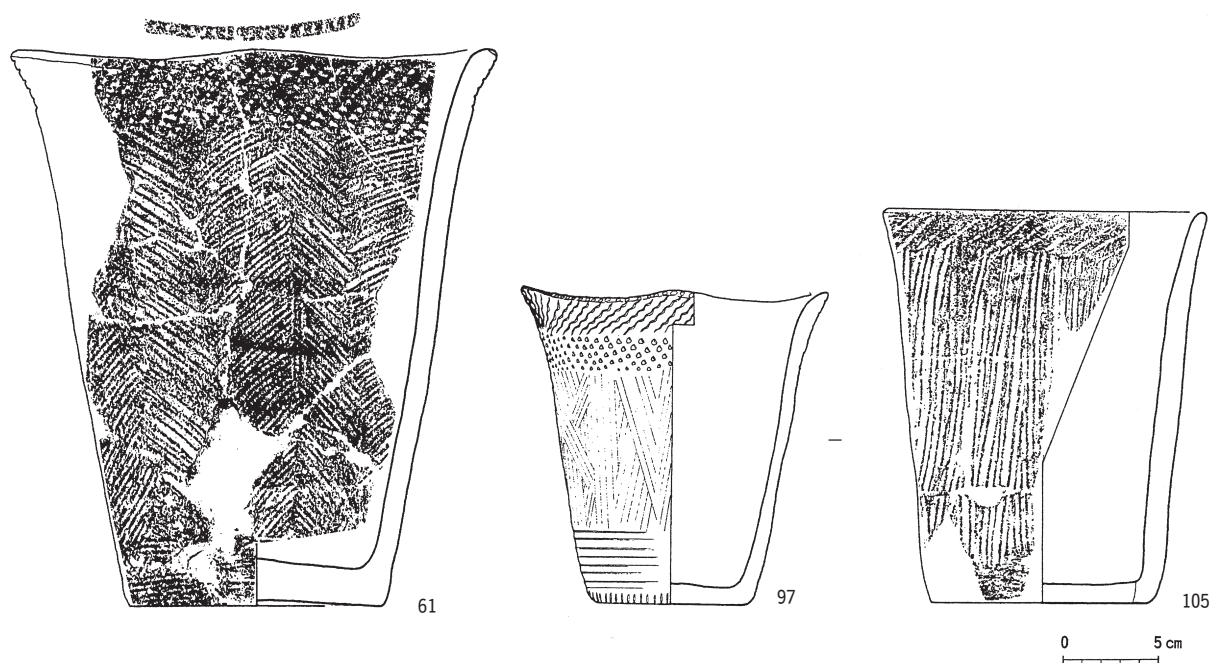
縄文時代前期から晩期では、集石遺構が2基検出されている。土器は轟式土器、曾畑式土器、阿高式系土器、出水式・南福寺式・綾式土器類似の形式などが出土しているが、全体的な量は少ない。石器は早期と同様なもののほか、石庖丁状の刃部磨製石器や扁平な環状に成形した軽石製品などが出土している。また、大型の扁平打製石斧も出土し、土掘り具としての用途が考えられる。

弥生時代の遺構検出はなかった。また、遺物の量も少ないが、下城式土器系統と考えられる甕形土器が1個体出土している。

古墳時代は、溝状遺構が1条検出されている。溝の方向は東西で、幅50cm～110cm、深さ約20cm、長さ17.6mにわたって検出されている。溝の埋土からは成川式土器の甕形土器・壺形土器・高坏形土器な

どが出土している。

平安時代の遺構としては、県内でも珍しい周溝墓と考えられる遺構が5基(第4図)、掘立柱建物跡2棟などのほか、多数のピットや土坑が検出されている。周溝墓は、人が埋葬された土壇(主体部)の周りに幅約50cmの溝を巡らしたものである。主体部から人骨の出土はなかったが、副葬品と考えられる土師器の埴や皿が出土している。また、主体部は土壇であると考えられるが、木棺墓の可能性も考えられる。周溝の平面形は、円形(1号・2号)、楕円形(3号・5号)、略方形(4号)の3形態で、U字状の断面形をしており、主体部に沿うように巡っている。この周溝の形態の変化は、時期差を示しているものと考えられ、他県の例や中世の周溝墓などから比較検討すると、円形→楕円形→略方形(→方形)の組列が考えられる。主体部から出土した土師器についての検討も加え、1・2号が10世紀中頃、3・5号が10世紀末から11世紀初め頃、4号が11世紀代と考えられている。また、4号と5号の周溝内にはピットが検出され、何らかの地上施設の存在がうかがわれる。4号からは角釘も出土しており、柱を立てて上屋をかけたものか、あるいは「餓鬼草子」や「親鸞伝絵」などの絵画史料に見られる周溝内の墓域を囲む柵などが考えられる。掘立柱建物跡は、2間×3間のもので、4号周溝墓に隣接しており、関



第3図 石坂式土器(縄文時代早期)

連する建物が考えられる。付近から焼塩壺の破片が集中して出土している。

平安時代の遺物は、開聞岳起源の火山灰である「紫コラ」(874年)層より上から出土している。土師器には埴・杯・皿・小皿・甕・鉢などがあり、製作時の轆轤からの切り離しにヘラを用いているところに特徴がある。12世紀中頃からは糸切りの技法が見られるようになるので、これらの土師器は9世紀末から12世紀中頃の時期が考えられる。ほかに、黒色土器、須恵器、焼塩壺、紡錘車、滑石製品などが出土している。

特徴

細石刃文化期においては、野岳型と畦原型の細石

核が共伴して出土したCブロックの資料が、その編年的研究を進める上で貴重である。

また、5基の周溝墓や土師器類は、南九州における平安時代の墓制や在地土器の様相を知る良好な手がかりとなった。

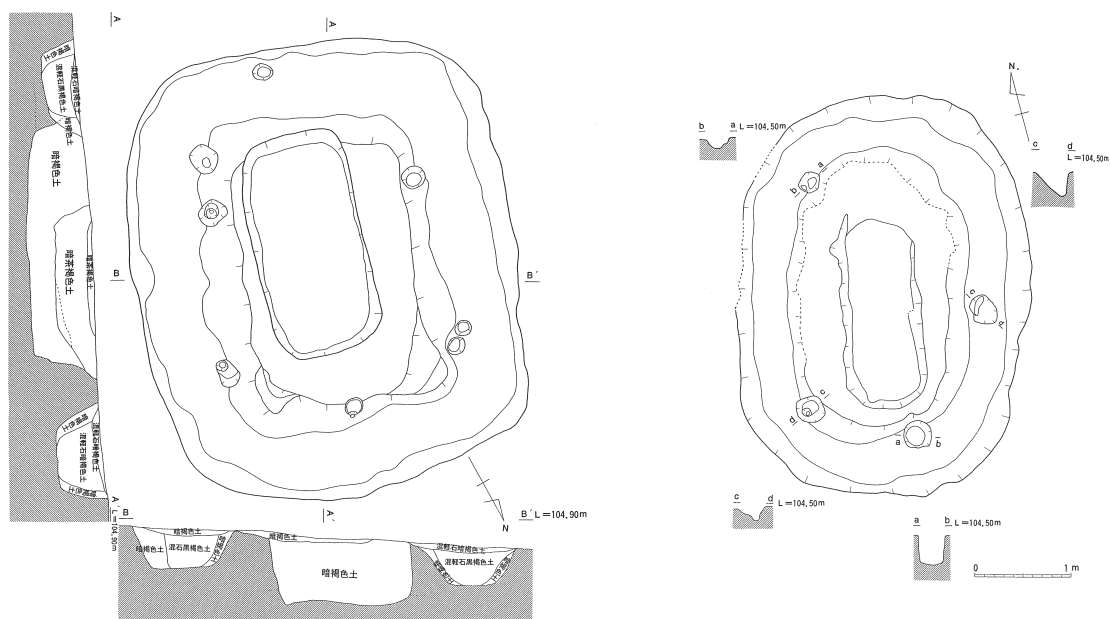
資料の所在

出土遺物は、鹿児島県立埋蔵文化財センターに保管されている。

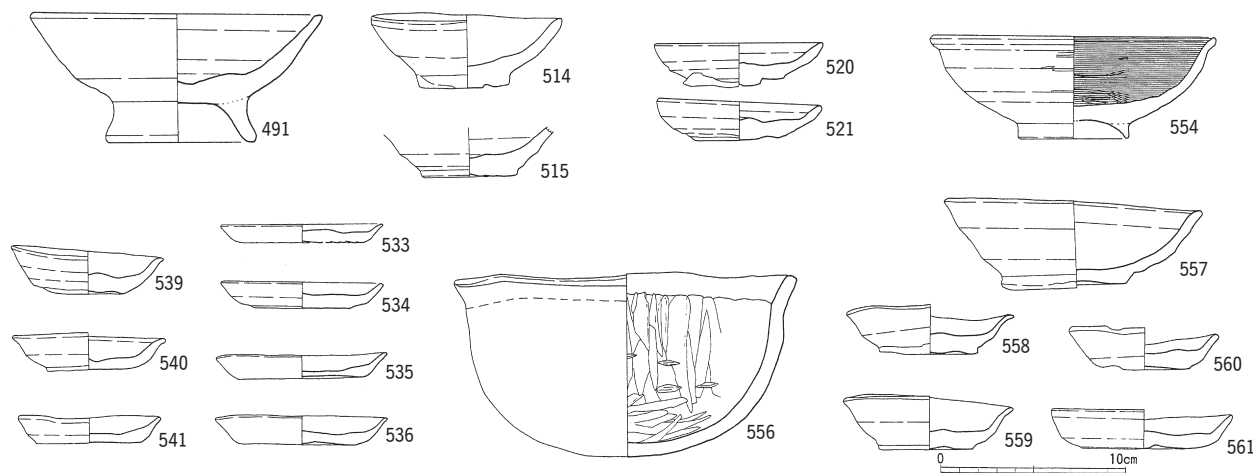
参考文献

鹿児島県教育委員会1992「榎崎A遺跡」『鹿児島県埋蔵文化財発掘調査報告書』63

(大久保浩二)



第4図 周溝墓(4号・5号)



第5図 周溝墓出土の土師器